

軍事史学

第58巻 第3号

巻頭言

四境戦争の概観

三宅紹宣

四境戦争（幕長戦争、長州戦争ともいう）は、長州藩を攻撃した幕府側が敗退したことにより、その権威を失墜させ、幕府権力解体の上で重要な転換点となった戦争である。戦争は巨大な勢力が勝利するという通常とは異なり、少数の長州藩が勝利するという結果をもたらしている点においても興味深い戦争である。

この戦争については、私はかつて『幕長戦争』（吉川弘文館、二〇一三年）で考察したことがあるが、各戦局については、史料が散在して残存しており、かつ、突き合わせが必要なことなど困難がつきまとった。この度、四境戦争が特集集にあり、おおまかな戦局を振り返ってみよう。慶応二年六月七日、幕府軍艦は、長州藩領熊毛半島先端および周防大島を砲撃し、四境戦争は開戦した。六月十日夜、山口の藩庁政事堂は応戦を決断し、諸隊および海軍を砲撃し、出動戦争は大島口においては、長州軍は、諸隊はもとより家臣団隊も小隊組織に編制されて西洋軍制化されており、地形を巧みに利用し、制高を重視し、情況に応じて広く散開する散兵戦術を用いて勝利した。

芸州口においては、六月十四日、開戦した。長州軍は散兵戦術を駆使した。対戦した高田藩の史料は、「長州軍は、山々峰々より立現れ、猿の如く駆け走り、味方の後ろを取り切り、こちらが打ち立てても砲丸はなかなか当たらない」と、機敏な動きを驚嘆しつつ伝えていた。長州軍は散兵戦術を駆使し、山岳地形を巧みに利用して、制高を重視する作戦を展開した。西洋式装備では、総合的に見れば征長軍のほうが上回っていた。しかし、西洋式戦法に習熟し、それを十分に使いこなした点に勝因があった。

石州口においては、六月十六日、長州軍は益田を攻撃し、福山藩軍・浜田藩軍と交戦し勝利した。長州軍は西洋式であり、散兵戦術を駆使して勝利した。福山藩は長州軍の散兵戦術について「追々詰め寄るに従い、散兵広く散る故、多人数のように思ってしまう。」とその威力を伝えていた。七月十八日、浜田城を自焼し、征長軍は浜田から退去した。

小倉口においては、六月十七日、長州軍は軍艦による砲撃のもと陸軍の田野浦・門司への渡海作戦を行い、小倉藩軍を打ち破った。長州軍は散兵戦術を駆使した。七月三十日、小笠原長行や諸藩軍は撤退した。小倉藩は要地に拠って戦争することにし、八月一日、城を自焼し、田川郡に向かった。以後、戦闘が続いたが休戦への動きが起こり、慶応三年一月二十三日、講和の和議が成立した。同日、国喪を名目として解兵令が発せられ、四境戦争は終結した。

四境戦争は、四境において多様な戦闘が展開された。これを各方面にわたって分析し、そのことによって全体像を明らかにするのは重要な課題であらう。

（広島大学名誉教授）